

## フィリピン貧困地域の衛生と感染症問題－SDGs との関連で

### Sanitation and infectious diseases in the poor areas in the Philippines: from SDGs perspective

新田目 夏実 (拓殖大学)

Natsumi Aratame (Takushoku University)

naratame@ner.takushoku-u.ac.jp

2015年に合意された持続可能な開発 (SDGs)は、ミレニアム開発目標 (MDGs) の成果をさらに一歩進め、あらゆる形態の貧困に終止符を打つことをねらうものであり、2030年までに、世界の全ての国で、経済成長、社会的包摂、環境保護という3つのテーマの調和のとれた開発を実現するために社会経済の変革を目指すものである。そこでは「誰一人取り残されない」こと、また途上国だけではなく先進国が対象になっていることが特徴である。このように、開発理念・開発戦略はMDGsからSDGsに至る過程で大きく変化した。世界には多数の「取り残された」人々が存在するのが現実であり、特に途上国においては、貧困削減という古典的開発目標が、依然として最重要な政策目標であることには変わりはない。本報告では、貧困にかかわる問題領域の中で、特にSDG6(水と衛生)、SDG11(持続可能な都市および人間居住)およびSDG3(すべての人に健康と福祉)を取り上げ、特に貧困地域における感染症と安全な水・トイレへのアクセスとの関連について明らかにする。具体的には、安全で安価な水へのアクセス(SDG6.1)、下水・衛生施設へのアクセス(SDG 6.2)と、新生児・5歳未満死亡率(SDG 3.2)および感染性疾患の罹患率(SDG 3.3)の関連を、フィリピンで行われたDHSおよびセブ島の貧困地域における現地調査結果にもとづき報告する。

まず、個人宅への配管給水は、マニラ首都圏のような大都市部であっても3割に満たない状況にあるが、首都圏外や農村部ではその割合はさらに低い。管理井戸・湧水へのアクセスを考慮にいれても、「安全に管理された水」へのアクセスは貧困世帯や貧困地域では特に低い。トイレについても、衛生的設備がなかったり、他人と共有しているため、感染症の危険にさらされている世帯がフィリピン全体で1/4近く、その割合は特に貧困地区に多い。フィリピンでは近年着実に疫学的転換が進みつつあるのも事実であるが、その意味で、SDG6(水と衛生)の改善は、特に脆弱な状況に置かれた人々が多数居住する貧困地域においては依然として重要な政策課題であり、SDG3(すべての人に健康と福祉)を実現するための効果的施策であるといえる。